

古戦場の荒野の物すぎき也、殊に噴火口の近辺は焼石
 兀突として起り満月の光景実に人をして血の氷るを覺
 へしむるものあり。目下噴火口は一個也。されど旧噴
 火口は阿蘇山中処々に在り、兎も角吾等が生息する此
 の地球は必ず冷却しつゝある也。彼の月球の如くに、
 されど怪む勿れ、天帝無窮の時間よりすれば地球の生
 命も野馬の生命も何ぞ長短を撰ばん。さても不思議千
 萬の宇宙かな。など噴火口の辺に立ち乍ら兄弟共語り
 申候 (以下略)



短歌

霧島山麓・大隅地方研修旅行 (2)

宮崎 千 ズ

(会員・佐伯市中村北町)

内の浦宇宙のことは地球まで幽けしわれに聞ゆるごとし
 内の浦ロケット発射に夢托し美宙橋を振り返へりみる
 群生の蘇鉄恋ほしも赤き実の靡く潮風都井の岬に
 都井岬車にすりよる仔馬あり立髪たたきて別れ惜しみぬ
 海水で芋を洗って食べるといふ幸島に棲む進化せる猿
 日南の海岸沿いにひと群のこばなせんなん清らに咲けり
 花園の名残りとどめし飢肥城おびじょうの秋の気配を楼門に聞く
 根をつけて漸く採りし花蕨わが持ち帰る旅のしるしに

十二月六日

